書評

ジャン・バーズリー『冷戦期日本の女性とデモクラシー』

Jan Bardsley, *Women and Democracy in Cold War Japan*. London: Bloomsbury Academic, 2014.

サンドラ・ウィルソン

本書はジェンダー問題を、より具体的には主婦像の変化を、一九五〇年代日本に焦点を定めて論じたものである。この試みにより、本書は、現在厚みを増しつつある、日本にとってきわめて重要なこの時期についての歴史的分析に大きく貢献することになった。ここで検証されるのは「一九五〇年代におけるデモクラシーの進展、経済復興、近代的な家庭生活をめぐる論争の象徴」（p.2）としての主婦イメージであり、著者は主として婦人雑誌と新聞の女性向け記事を材料に、「一九四九年後半から一九五九年後半にかけて日本の主婦の文化生活をめぐって起きた論争」（p.2）の数々を議論していく。そこに共通するテーマのひとつは、このころメディア報道で広く一般に浸透した考え方、すなわち、戦後期がまぎれもない新時代であること、そしてその新しさは、女性が何をし、何を求め、どのように行動するようになったかに現れているというものである。もう一つは、欧米型の行動やこの時期固有の日米関係が日本女性に与えた影響である。

本論の最初の三章では、特に主婦にフォーカスして、いわゆる「新しい日本女性」とは何か、そしてそういう女性がとくに戦争以降、どのように変わったかをめぐるメディアの論争をとりあげる。このうち第二章では、日本が占領下にあった一九四九年に日本語と英語双方の新聞紙上で巻き起こった論争を分析する。この論争のきっかけとなったのは、茂木照子という日本人主婦からの投書である。茂木は近所に住むアメリカ人の粗野なふるまいについて、

あまりに物質主義的でがさつで不作法だと不平を述べ、これに対する四人の著名なアメリカ人女性からの返事も掲載された。茂木の投書に対しては読者から批判が殺到したが、茂木をある程度支持する人たちもいた。この茂木論争について著者は、家庭と主婦という問題が俎上に上り、それらがどれくらい民主的、近代的であるかについて疑問を喚起すると同時に、戦後の日本で占領している側とされている側の豊かさの格差を意識させたと分析する。

第三章では、一九五五年から一九七六年までメディアで延々とつづいたいわゆる「主婦論争」の第一年目を論じる。発端はジャーナリスト石垣綾子が一九五五年に『婦人公論』に掲載した記事だった。石垣は日本の主婦が怠け者で未成熟で無知だと批判し、これに対して賛否両論がつぎつぎと寄せられた。著者によれば、こうした投書はいずれも日本の主婦が戦争と敗戦によって変貌したことは一致して認めながらも、その主婦たちが今では民主的になり自己主張するようになったのか、それとも子供っぽくて怠け者なのか、また、まじめに働く夫にとって誠実な伴侶なのか、それとも女性も労働階級の一員と見るべきなのかについては一致しない。

第四章が扱うのは、日本女性の抱く「戦後の欲求」をめぐるメディアの扱いである。一九五六年後半の『婦人公論』に、いわゆる「新しい女」たちが性的、金銭的、物質的に求めるものは何か、それを得るためにどういう手段を用いたか、またそれに対して男たちはどう反応したかというアンケート調査とそれに対する意見の応酬が掲載された。この論争は、戦後の民主的改革が「セックス、冒険、物質的快適さに対する女性の途方もない欲求を解き放った」(p.3)ことへの怯えを露呈させたと著者は考える。とくに破廉恥と思われるふるまいについては、欧米の影響のせいにされたりしたが、少なくとも『婦人公論』が伝えるかぎりでは、大多数の女性の欲求はごく慎ましやかなものだった。例えばあるアンケートで「今は持っていなくて、いちばん欲しいものは何ですか」と聞かれて、主婦たちが欲しがったのは洗濯機、家、お金であり、「サラリーガール」が欲しがったのはお金、ピアノ、恋人だった(第十二位に「頭脳」が入っている)。女子学生たちは車、家のつぎに、実現性があるとは思えないが兄または姉を欲しがった(p.87)。男たちは、戦後に人格形成をした若者でないかぎり、女たちの自信に満ちたふるまいにひるみ、抵抗を示したとされる。

第五章と六章では、一九五八年から五九年にかけてメディアを席巻し、女性の役割について日本の国内外に広範な論争を巻き起こすきっかけとなった二人の特別な女性について述べる。一九五八年、当時の皇太子と「平民」正田美智子との婚約が発表された。その後、メディアの熱狂的な報道は一九五九年四月の成婚まで続いた。著者の分析によれば、正田美智子は「国民のプリ

ンセス」となり、その結婚生活は日本の主婦の模範とされた。成婚に関わる費用や天皇制に代表される社会的不公平に対して多少の批判はあったものの、世論の大半はこの結婚を戦後民主主義と友愛結婚の勝利として支持した。一方、一九五九年にカリフォルニア州ロングビーチで行なわれたミスユニバース世界大会で、ミス日本の児島明子が優勝した。コンテストに出場し、それをその後のモデル業と広告業のキャリアに最大限に利用しようとする児島の明らかな野心は、日本国内に大きな違和感と批判を呼び起こした。淑女のすべきことではない、はしたないというわけだ。だが大勢としては、中国戦線で戦死した父を持ち、貧しい家庭で育った四人の遺児の一人である児島の成功物語は、日本の戦後復興の象徴とされ、国際社会における日本人の新しい可能性を示し、多くの日本の若い女性が美人コンテストへの出場に憧れるようになった。

最終章は円地文子の一九五八年の有名な小説『女面』を分析する。著者によれば、これをとりあげたのは一九五〇年代日本において支配的だった女性らしさとの対比を示すためだという。複雑でエロスに満ち満ちたこの復讐小説の女主人公たちには、台所のプリンセスとも美人コンテストの優勝者とも、共通点は何一つない。それどころか彼女らは近代的な家電や豪華なファッション雑誌が約束してくれるものにではなく、古代にさかのぼる日本の過去およびその美的、文学的遺産に魅せられた魔女である。とはいえ、この小説はつまるところ家父長制に替わるものにも、それへの根源的挑戦にもなりえないと著者は結論する。

本書があつかう資料は豊かで刺激的だ。であればこそ、個別の材料を一つの全体像にまとめ、ここにとりあげられたメディアの話題や小説の持つ意味を包括的に論ずるような「結論」がないのはもどかしい。日本女性をめぐるメディア論争と、一九五〇年代国内外の広範な政治的、社会的文脈との関係をもっと詳しく説明すれば、「結論」はとりわけ価値あるものになっただろう。主婦やプリンセスや美人コンテストの勝者に対するメディア報道がいかに冷戦戦略を支え、日米の公式の関係を補強したり浸食したりしていたかを語るヒントは本書全体いたるところにある。だが、こうしたテーマをより包括的に論じるには、婦人雑誌の記事をその他の資料と並置する必要があったろう。本書の強みは、一九五〇年代の婦人雑誌が日本女性のステレオタイプをいかに伝え、反映し、鋳造し、疑問視したかについての詳細な叙述にある。そして、これらの記事や論争で前提となったのは、一九四五年以来日本の主婦が根本から変貌したこと、そして主婦が変われば国家が変わるということだった。本書は、これから一九五〇年代日本を扱う研究者にとって多くの刺激を提供するだろう。

（翻訳：朝倉和子　翻訳家［SWET所属］）